

## ◇ 国 語

国 7-1～国 7-15 まで 15 ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

都市に技術の成果としての文明をみてとり、田園から風土の産物としての自然を感じとろうとするのは間違いである。村落や田畑のみならず森林や湖沼までもが、多かれ少なかれ、人為的に加工されたものなのだ。都市的人為と田園的人為のあいだの差は歴史的継承性が弱いか強いかという点にある。田園は、その強い歴史的継承性のために急激な変化を好まず、そのゼンシン性のおかげで、人間生活にかかわる様々な要素を総合するために必要な時間的余裕を持つ。

これにたいし都市は分析性を旨としている。合理的にとらえることのできる人間生活の局所を分析して取り出し、それを急進的に普及させようとする。この都市の持つ分析性と急進性が都市住民の精神のうちに歴史的断絶感をもたらし、それが現代人における様々な精神的疾患の原因となっている。

そうなのだということを、たとえば産業革命完了後のイギリスは自覚した。より広くいって、ヨーロッパ諸国が農業国としての体裁を保ちつづけているについては、そうした文明にたいする防波堤としての文化を、田園のうちに確保せんとする国民精神が作用していたのである。またそういう田園のあり方が都市にも反作用して、ヨーロッパ諸都市は歴史的継承性つまり伝統を重んじる方向で維持されている。

日本の田園は、風土の違いゆえに、表面ではヨーロッパのとは大いに異なっている。しかし、その精神の構え方においては、田園を文化の根拠地としていたという点で、またそれが都市のあり方にも反映していたという点で、ヨーロッパのものにコクジしている。アメリカ化の波にさらされてきたこの半世紀間、日本の田園と都市は本来の歴史的軌道から大きく外れてきたのである。アメリカニズムがグローバリズムを僭称<sup>②</sup>しつつ猛威をふるっている今、ヨーロッパの田園のことを想起し、それを媒介にして、日本の（過去というよりも）本来の姿に思いをいたしてみてもよいのではないか。そういう志向実験が戦後的なものにたいする精神の防腐剤になるに違いない。

ヒンドゥ教徒にかぎらず大方の人間は、人生の最末期、林のなかに住みたい、あるいは田園のなかで過ごしたい、と強かれ

弱かれ願望するものようだ。それは、単に、動物としての人間の自然回帰の性向を表しているだけではない。都市における（変化それ自体に意味を見出すものとしての）流行の場から身を退かせて、何らか ア の精神的基準を求めようとすると、それに適した場所は田園であるように思われるということなのであろう。

イ 田園ならばどこでもよいということではない。また田園といったとて、そこには村や町といわれる小さな都市が待ち構えている。つまり、林住の地の実際の姿はガーデンシティ（庭園都市）あるいはカントリータウン（田舎町）であることが多いのだ。いずれにせよ、田園と密着した場所で歴史の連続性を、さらには自然との接続性をカンジュし、そこから真善美にかんする ア の基準を認識したいと思う、それが精神的存在としての人間のやみがたい傾向だといえる。そしてその傾向が満足させられるためには、田園における人々の生活や景観が、真善美の基準をかすかにせよ指し示すほどに、精妙に組み立てられていなければならない。

そこで、田園コミュニティの形成という人為の歴史的積み重ねが、人々の共同の企てとして追求されることになる。この長きに及んでいた企てを乱暴に放擲し無惨に破壊してきたのが日本の戦後である。とりわけ蔑ろにされたのは、ソキエタス（社交体）としての田園生活であろう。ソキエタスにあつては、人々の会話のなかで真善美の基準が陰伏的に「示される」。それにたいし、（近代主義的な）都市にあつては、ウニヴェルシタス（世界体）が支配し、当初から真善美の基準が（自己を疑うことを知らぬ知識人によつて） ウ 「語られる」のである。都市におけるそうした精神の未熟を脱するべく、人々は精神の成熟のために田園へと向かうのだ。

良かれ悪しかれ人間には自意識があり、それゆえ精神のオートノミー（自律性）をタンサクセ<sup>o</sup>ざるをえないのが人間の宿命とあってよい。いうまでもないことだが、歴史的かつ社会的な存在としての人間に（純粹な意味での）自律性は、したがってセルフガヴァメント（自治力）も、ありはしない。しかしそれにもかかわらず、自律・自治の根拠を究明したいと念じるのが人間の自意識というものである。

<sup>三</sup> 田園は、少なくとも都市と比べて、自律の可能性が大きい。それはまず、生活必需品の多くが、さらには奢侈品の少なくな

い割合までもが、そうしようと努力すれば田園コミュニティのあたりで自給できるという自信に根差している。とくに、社会が全体として危機あるいは恐慌の状態に入ったとき、その限界状態でも何ほどか自給自足できであろうという見込みが、田園に住まう人々の意識をして自律的なものにする。

都市生活者は エ 主義者ではあっても オ 主義者ではない。個人の自律を可能にする社会的かつ歴史的な条件が都市には(多くの場合)欠けているからである。田園生活者は、イン<sup>E</sup>シユウに染まった カ 主義者にみえようとも、自立せる個人になる可能性を多く秘めている。自己の生活の根拠について確かな手触りを持つことができるからである。

この手触りは生活の物質的側面においてのみ生じるのではない。通常に共同体的といわれている田園の生活形態の規制がよほどに厳しいものでないかぎり、共同体という名のソキエタス(社交体)を通じて、自意識の根拠が社会のなかに広く(また歴史のなかに深く)つながっていることを自覚できるのである。

(西部邁「精神の成熟地としての田園」『発言者』45号)

問一 傍線部 A・B・C・D・E と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A ゼン|シン

- ① ゼン|ジ 進歩が見られる
- ② マン|ゼン|と時を過|こす
- ③ 総理の座をゼン|ジョウ|する
- ④ ゼン|コウ|を積む
- ⑤ ゼン|ジン|未到の快挙

1

B コク|ジ

- ① 苦難をコク|フク|する
- ② 病名をコク|チ|する
- ③ ゴコク|豊穰を祈る
- ④ シン|コク|な事態
- ⑤ コク|ハク|な性格

2

C カン|ジュ

- ① 新聞購読のカン|ユウ
- ② 流行性カン|ボウ|にかかる
- ③ カン|違いする
- ④ カン|ワ|休題
- ⑤ その分野はモン|ガイ|カン|だ

3

D タン|サク

- ① 時代サク|ゴ
- ② 作文のテン|サク
- ③ タイ|サク|を講じる
- ④ サク|バク|とした風景
- ⑤ 労働者からのサク|シユ

4

E イン|シユウ

- ① ゴウ|イン|なやり方
- ② 良いイン|シヨウ|を与える
- ③ イン|スウ|分解する
- ④ イン|ボウ|をめぐらす
- ⑤ イン|ナイ|感染が起こる

5

問二 傍線部 (a)・(b) の本文中の意味として最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

(a) 僭称

- ①自分の身分を表す称号を謙遜して名乗ること
- ②自分の身分に相応の称号をきちんと名乗ること
- ③自分の身分を超えた称号を勝手に名乗ること
- ④自分の身分より下の称号をわざと名乗ること

6

(b) 放擲

- ①すべきことをしないでほうっておくこと
- ②追い立てるようにひどい扱いをすること
- ③自主性に任せあるがままにしておくこと
- ④自分の都合で無理矢理変えてしまうこと

7

問三 空欄 ア・イ・ウ に入る最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア は二カ所あるが同じものが入る。

ア

- ①無益
- ②無限
- ③不毛
- ④不易

8

イ

- ①さて
- ②もちろん
- ③したがって
- ④さらに

9

ウ

- ①明示的に
- ②暗示的に
- ③比喩的に
- ④偽善的に

10

問四 空欄  |  |  に入る語句の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～④の中から

一つ選べ。

|  |

- ① 集団 | 個人 | 利己
- ② 個人 | 集団 | 利己
- ③ 利己 | 個人 | 集団
- ④ 集団 | 利己 | 個人

問五 傍線部 (二) 「精神の防腐剤になる」の具体的な説明として、最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

- ① アメリカ化の波にさらされることで歴史的軌道から外れつつある日本の田園と都市だが、ヨーロッパの田園を想い起こすことで、本来の姿を取り戻すことにつながる。
- ② 日本の田園は、風土の違いからヨーロッパの田園とは大きく異なるが、あえてヨーロッパの良さを取り入れることにより、アメリカ化による失敗を取り戻すことができる。
- ③ 日本の田園と都市は本来の歴史的軌道から外れてきたが、アメリカとヨーロッパの良い点をあわせて取り入れることにより、原点に立ち返って再認識することができる。
- ④ アメリカ化の猛威から逃れるために、ヨーロッパの田園を媒介にして考えることによって、どちらのものでもない本来の日本の田園というものが新しく生まれてくる。

問六 傍線部(二)「田園は、少なくとも都市と比べて、自律の可能性が大きい」とあるが、その背景にある事実として不適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

13

- ① 田園は都市とは異なり、生活に必要なものが自分たちの中で作られている。
- ② 田園では精神的に自意識が芽生えないが、物質的には自律を促す根拠がある。
- ③ 都市では危機的状況に陥った場合、必要なものが手に入らず他に頼ってしまう。
- ④ 都市には個人の自律を促すべき社会的、歴史的条件が欠けている場合が多い。

問七 「都市」と「田園」について述べたものとして、間違っているものを、次の①～④の中から一つ選べ。

14

- ① 都市というものは急激な変化を好む傾向にあり、田園は逆にゆるやかな変化を好む傾向にある。
- ② ヨーロッパの都市は、多分に田園的要素を重んじているが、アメリカの都市はそうではない。
- ③ 都市に住んでいるものは、年齢を重ねるにつれて、都市の流行から離れ田園を求めるものだ。
- ④ 日本では現在も、かつての田園が持つ歴史の連続性を守っており、都市と一線を画している。



問八 本文中の内容に合致するものを、次の①～④の中から一つ選べ。

15

- ① たいていの人間は年をとるにつれ田園を求めるが、それは専ら動物としての自然回帰の性向に基づくものである。
- ② 人間には自意識があるが、歴史的かつ社会的な存在としての人間に自律性を求めることには本来無理がある。
- ③ 都市には物があふれており、その自信から都市生活者は田園生活者と比べ、より自律的な精神を持つのである。
- ④ 都市と田園とは歴史的継承性があるかないか、分析性を持つか持たないかで、厳密に区別することができる。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

なにもかもどこかに追いやって四国路を踏みしめたいという思いが年を追って深まってきている。そう思いながらも一方で、まだ機が熟さないというためらいがあり、なかなか踏み切ることができなかった。

あれは四十四歳のときだった。初めてお遍路というものをしたことがあり、それ以来ずっと、四国路のあちこちを歩いている自分の足先や杖の響きがこころのどこかに居すわっていた。高知の海の色や愛媛の山の面影がふっと閃いてこころを騒がすこともあった。

あの初遍路は、考えてみれば純粹のものではなかった。新聞に「お遍路」の記事を書くというのが目的で、そういう目的をもちながら札所を打つことにくばくかの後ろめたさや疎外感を抱きながら歩いたものだ。徳島県と高知県を歩いて、新聞に書く仕事は終わった。あとの半分は仕事を離れ、休みをとって歩いた。日々、歩いて過ごす、からだを動かしながら思いを煮つめてゆく、というのが私自身の呼吸にあっていたのだろう。結局、四国の霊場八十八カ所をくまなく歩き終えた。

半分は書くという目的のためだったが、あとの半分は、ちよつと立ち止まって自分の生き方に向き合いたいという気持ちだった。長く生きていれば随分とヨケイなものがこびりついてしまっているだろう。曲がりくねった幹を真っ直ぐになおすことは難しいとしても、木肌や葉に堆積したオセソ物質を洗い流すことはできるだろう。いや、少なくともそういうものの存在に気づくことはできる。己の思い上がり、ひねくれ、コウガン、虚栄心などに向き合わずに生きるよりは、向き合ったうえでこれからの人生の後半戦を考えたほうがいいと、まあ、そんな殊勝な気持ちで歩いたわけだが、歩いたあとは自分の後ろ姿が少しは見えきたし、新鮮なものがからだに吹きこんできた、という実感があつた。

(中略)

歌人吉井勇も、四国路に誘われたものの一人だ。勇が土佐の山峡の地、猪野々に隠つてこころの傷を癒したのは四十代の後半だった。そのころの一連の歌にはこの歌人の当時の心境がよく表れている。

四国路へわたるといへばいち早く遍路ごころとなりけるかも

一九三四年の歌だ。このころの勇は父の死、巨額のフサイ、妻との離別などが重なり、無頼の日々を送っていた。何度か四国を訪ねていて、この年も土佐の風土に誘われて山峡の地にやってきたのだ。自分を癒してくれる薬草がそこにはあるとすがりつきたい思いだった。

かくばかり弱きところを癒すべき薬草なきか土佐の深山に  
石に坐し雲をながめてあるほどに羅漢（註）ごころとなりにつけらしも

「身は雲に心は水に」まかせた日々を送るうちに次第に立ち直つてゆく。ア そのものが、勇には薬草だった。  
こころに深い傷をもつ人も、さして深くはない傷をもつ人も、薬草（註）に誘われるようにして四国にやってくる。

海道を暮れて歩ける遍路ひとり 誓子

四国に誘われるとき、人はたぶんこんな風景を思い浮かべるだろう。この場合、遍路はイ でなければならぬ。  
独り旅を通したい。

たそがれどき、海辺の道を歩く。ザンショウ（註）が消えてゆく。淡墨色の風のなかを歩く。沖はぼうとかすんで、空と海の境はもはやさだかではない。連れは一本の杖だけだ。

寺から寺へ歩く、ということ（註）は山河に身をゆだねるときを持つことで、ここをからっぽにし、谷を渡る風、海辺に遊ぶ風に身を托けこませて歩けば、たぶん私のようなものにも、超過密社会の日常にあつて見えなかったものが見えてくるだろう。非日常の天地に身をおくには群れを離れたほうがいい。誓子の「遍路ひとり」にはそういう重みがある。仲間と連れ立って歩くのもいいし、それはそれで楽しいだろう。ただ、今回の旅は、独り旅を原則にしたいと自分に言い聞かせた。

（辰濃和男『四国遍路』による）

（注）羅漢——阿羅漢の略。仏教の修行の最高段階、また、その段階に達した人。

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選ぶ。

A ヨケイ

- ①セイケイを立てる
- ②ルイケイに分類する
- ③ケイシキを重んじる
- ④ケイヤクを結ぶ
- ⑤オンケイを施す

16

B オセン

- ①シンセン境をさまよう
- ②センタク物を干す
- ③センスイ具を身に付ける
- ④センシヨク技術を学ぶ
- ⑤生活様式のヘンセン

17

C コウガン

- ①コウヨウ樹林
- ②生活がコウジョウする
- ③オンコウな性格
- ④コウゲン令色
- ⑤原稿をコウセイする

18

D フサイ

- ①サイケンを放棄する
- ②借金をヘンサイする
- ③サイバンを受ける
- ④カサイ保険に入る
- ⑤野菜をサイバイする

19

E ザンシヨウ

- ①シヨウキヤク炉
- ②シヨウネツ地獄
- ③悩みが雲散ムシヨウする
- ④車がシヨウトツする
- ⑤原簿とシヨウゴウする

20

問二 傍線部 (a)・(b)・(c)・(d) の意味として最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

(a) 機が熟さない

- ① やる気がまったくおこらない状態
- ② 経済的にかなり不安定な状態
- ③ 物事を行うのに十分でない状態
- ④ 身の整理が十分に進まない状態

21

(b) くまなく

- ① 程なく
- ② 難なく
- ③ 無事に
- ④ 残らず

22

(c) 殊勝な気持ち

- ① あいまいな気分
- ② やる気満々の気構え
- ③ 自分勝手な思い
- ④ けなげで感心な心もち

23

(d) 無頼の日々

- ① 何物にも頼らず過ごす日々
- ② 定職もなくぐうたらに過ごす日々
- ③ 誰も信じてあげることができず過ごす日々
- ④ 「無」を信条にして過ごす日々

24

問三 空欄

ア

イ

に入る最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア

①お遍路

②土佐の深山

25

③弱きところ

④羅漢らかんごころ

イ

①晩秋

②海道

26

③独り

④非日常

問四 傍線部(二)「いくばくかの後ろめたさや疎外感を抱きながら歩いた」に表現される筆者の「疎外感」の説明として、最

も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

27

①新聞記者として特別扱いされることを嫌に思うこと。

②職業を隠してお遍路をすることを気恥ずかしく思うこと。

③他のお遍路が記事に書かれまいと用心している態度を寂しく思うこと。

④他のお遍路に対して自分は本物のお遍路ではないと、近寄り難く思うこと。

問五 傍線部（二）「薬草」の本文中の意味として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

- ① 様々な心の病に効く薬を総称している。
- ② 心を癒してくれる四国路のたとえとしている。
- ③ 人生に疲弊した心を癒すものの比喻としている。
- ④ 土佐の山奥に生えている漢方薬の原料となる草をいう。

28

問六 傍線部（三）「山河に身をゆだねる」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

- ① 厳しい自然の中に身を置くことで心身を鍛えること。
- ② 自然のありのままの営みに自分のありのままの姿を溶け込ませること。
- ③ 大自然への畏敬の念を取りもどそうとすること。
- ④ 人付き合いの煩わしさから逃れて孤独を楽しむこと。

29

問七 本文中に登場する「吉井勇」の短歌を、次の①～④の中から一つ選べ。

- ①かにかくに祇園は恋し寝るときも枕の下を水のながるる
- ②幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ国ぞ今日も旅ゆく
- ③その子二十櫛にながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな
- ④はたらけどはたらけど猶わが生活樂にならざりちつと手を見る